

05 古文の知識

1 陰暦（旧暦）

古文が書かれた時代には、月（太陰）の満ち欠けを基準にした暦（陰暦・旧暦）が使われていた。明治6年（一八七三年）から、太陽の動きを基準にした現在の暦（太陽暦・新暦）が使われている。陰暦と太陽暦は、一か月ほどずれるがある。

2 季節の区分・陰暦の月の異名・二十四節気

春夏秋冬の区分が現在の暦と異なる。また、陰暦の各月には異名があり、それぞれの季節を示す名称として二十四節気（太陽の位置によって一年を二十四等分して表したもの）が使われていた。

季節	月	異名	二十四節気
春	一月	睦月	立春
二月	如月	啓蟄	雨水
三月	弥生	清明	春分
		穀雨	

3 古文における日付の呼び方

冬	秋	夏
十二月 十一月 十月 九月 八月 七月 六月 五月 四月	霜月 神無月 長月 葉月 文月 水無月 芒月 卯月	立雪 大雪 小雪 冬至 大寒 小寒 立春 雨水 驚蟄 春分 清明 穀雨 立夏 小满 芒种 夏至 小暑 大暑 立秋 处暑 白露 秋分 寒露 霜降 立冬 小雪 大雪 冬至 小寒 大寒

5 一日の時間帯を表す言葉

一日のうちのそれぞれの時間帯を表す言葉も、現代とは異なる呼び名がある。

夜	昼	朝	明け方
あかつき（未明）	あけぼの（明け方）	あさぼらけ（明け方）	つとめて（早朝）
あした（朝）	ひる（昼）	ゆふ（夕方）	よひ（夜）
よもすがら（一晩中）	ひねもす（一日中）		

※夜明けや夕方の薄暗い時を表す言葉には、次のようなものがある。

- ・ かはたれどき（彼は誰時）
- ・ 主に明け方
- ・ たそかれどき（誰そ彼時）
- ・ 主に夕方

6 十干十二支

十干…古代中国の「陰陽五行説」における五つの元素（木・火・土・金・水）と陽気（兄）・陰気（弟）とを組み合わせたもの。

甲（木の兄）	乙（木の弟）
丙（火の兄）	丁（火の弟）
戊（土の兄）	己（土の弟）
庚（金の兄）	辛（金の弟）
壬（水の兄）	癸（水の弟）

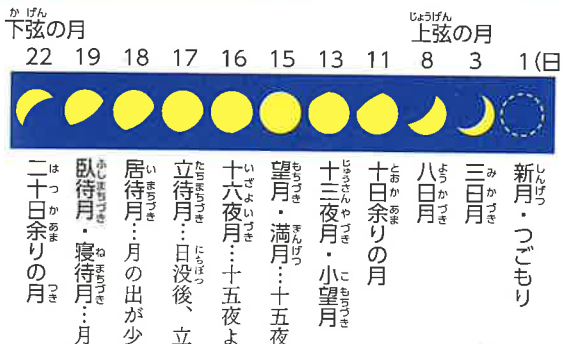
十二支…古代中国で太陽の通り道を十二分して表したもの。のちに十二の動物の名が当てられた。

子（ね、シ）	丑（うし、チュウ）
寅（とら、イン）	卯（う、ボウ）
辰（たつ、シン）	巳（み、シ）
午（うま、ゴ）	未（ひつじ、ビ）
申（さる、シン）	酉（とり、ユウ）
戌（いぬ、ジュツ）	亥（ゐ、ガイ）

干支…十干と十二支を合わせた六十組で、年月日や時刻、方向を示すのに用いた。

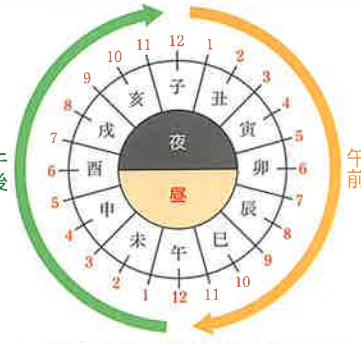
4 月齢と呼び名

月は、光っている部分がない状態（新月）から少しずつ満ちていき、十五日目に満月となる。その後、少しずつ欠けていき、また新月となる。



7 古時刻

一日を十二に分け、十二支を当てはめて表した。例えば、午前零時は前後二時間が子の刻となる。



8 古方位

三百六十度を十二に分け、十二支を当てはめて表した。北一子、東一卯、南一午、西一酉、北東一辰、南東一巳、南西一未、北西一申という。



月の呼び名

月は、陰暦に沿った呼び方がされていた。例えば現在でも使う「三日月」は、陰暦三日の月の呼称の名残。また、月の入りの際の形状を「弓」に見立てて、弦を張る側月の欠けている側（上）にある状態を「上弦の月」、下にある状態を「下弦の月」と呼んだ。



活用の種類	基本形	語幹	終止形	連体形	已然形	命令形
ナリ活用	おはれなり	あら	なり	なり	なれ	なれ
タリ活用	たう	た	たり	たる	たれ	たれ

助動詞

付属語で活用があり、自立語や他の助動詞に接続してさまざまな意味を添える。

助動詞の種類	意味
過去	き 過去(〜タ)
完了	たり 完了(〜タ・〜シタ)
打消	ず 打消(〜ナイ)
推量	べし 推量(〜ダロウ・〜ヨウダ)

終助詞：文末に用いられ、詠嘆・希望・禁止などを表す。

係り結び：係り結びには、文中で用いられた場合、文末(結び)に一定の形を要求するものがある。これを係り結びの法則という。

係り結び

係り結びになる係助詞

係助詞	結び	意味
ぞ	連体形	強意
なむ	連体形	強意
や	連体形	疑問・反語
か	連体形	疑問・反語
こそ	已然形	強意

例 さぬきの造となむ言ひける。

係助詞「なむ」を受け、文末が終止形「(けり)」ではなく、連体形「ける」で結ばれている。

推量	推定	打消推量	伝聞	断定	受身	尊敬	自能	可敬	使役
らむ	けむ	まじ	なり	なり	る	る	らる	さる	しむ

現在推量(今ゴロハ〜テイルダロウ)	現在推量(今ゴロハ〜テイルダロウ)	打消推量(〜ナイダロウ・〜マイ)	伝聞(〜トカイウ・〜ソウダ)	断定(〜ダ・〜デアル)	受身(〜レル・〜ラレル)	尊敬(オ〜ニナル・〜ナサル)	自能(自然ニ〜レル)	可敬(〜コトガ)デキル	使役(〜セル・〜サセル)
-------------------	-------------------	------------------	----------------	-------------	--------------	----------------	------------	-------------	--------------

・係り結びの注意点

結びの消滅(流れ)

接続助詞「とも」が接続して文が続き、結びが已然形になっている。

例 たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、いのちばかりはなか生きざらむ。

結びの省略

例 中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば垣根はあるにはあるが、一つの家のようであるので……。

例 中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば垣根はあるにはあるが、一つの家のようであるので……。

例 中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば垣根はあるにはあるが、一つの家のようであるので……。

例 中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば垣根はあるにはあるが、一つの家のようであるので……。

希望	比況
まほし	たし
希望(〜タイ・〜テホシイ)	比況(〜ヨウダ・〜ト同シダ)

助詞

付属語で活用がなく、自立語についてその語と他の語との関係を示したり、意味を添えたりする。助詞には、六つの種類がある。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

格助詞：体言や体言に準ずる語(連体形など)に接続し、文中の他の語とどのような関係にあるかを示す。

